



モンゴルで注目を集める ユニークな高校

モンゴルの首都、ウランバートルにある新モンゴル高等学校(以下、新モンゴル高校)は、ジャンチブ・ガルバドラッハ校長が、「国づくりは、人づくりから。世界基準の教育を施して、これからモンゴルの発展を担っていく人材を育成したい」という熱い思いをもって、2000年に設立した私立学校だ。1,000人を超える卒業生たちの中には、日本への留学を果たし、その経験を生かして、既に、モンゴルの財界・政界で中心的な役割を果たしている者もいる。

その学校で、唯一の日本人教員として

働く増田 匠さんの役割は、多岐にわたる。日本語の授業はもちろんのこと、日本の大学を受験する生徒たちの志望理由書の指導や添削、日本の高校や大学からの視察の受け入れ、日本留学試験対策特別授業のための教員確保、さらには、会計までも担当している。特に、日本への留学試験などの前は、一人でも多くの合格者を出すために、徹夜で働き続けたこともある。そのかいもあって、毎年20人以上の卒業生が日本への留学を果たしている。しかも、全員が、奨学金を得ているのだ。

「こちらでの生活で、息抜きは?」と聞くと、「息抜きどころか、休みさえほとんどありませんよ。強いて言えば、週1回、学校の体育館で行われるサッカーですかね」という答えが返ってきた。どうやら、休日も学校から離れる時間はない

ようだ。

そんな忙しい日々の中、増田さんのエネルギー源となっているのは、生徒たちのやる気だ。

「初めてシャドーイングを授業に取り入れたとき、うまくできなくて、悔しく思ったのか、生徒たちの多くが、休み時間になんでも、机から離れずに続けようとするんです。真剣に、できるまで何度も行おうとする姿勢に、感心しました。本当は授業時間内に終わらせなければいけないんですけどね(笑)。ただ、こういうふうに、生徒たちのやる気がすごくて、授業を切り上げられないことが、度々あるんです」

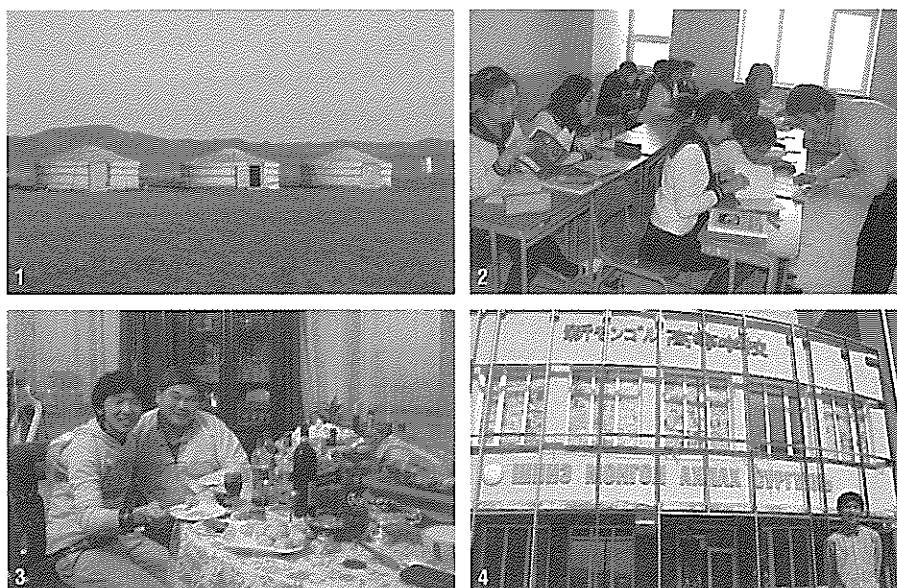
そんな多忙な職務を抱えながらも、2年間で、新たなプロジェクトを立ち上げてきた。その一つが、日本の高校生と新モンゴル高校の生徒とをつなげる「テレビ会議」である。現在、月1回のペースで、三重県にある津田学園の生徒と、環境問題をテーマにした討論を行っている。この他、日本の大手旅行会社と協力して、新モンゴル高校を訪問する教育ツアープログラムもつくれた。

このような活動の背景には、常に「生徒のため」がある。生徒には、日本留学のために必要な力と、留学後に必要な力の2つを身に付けさせたいという思いがある。

「一生懸命勉強して、せっかく日本への留学を果たしても、結果的に、留学生同士で固まってしまうことが多い。日本

の大学生にも、留学生と話がしてみたいけれど、なんだか近づきがたい、というイメージがあるように思う。モンゴルにいるうちから、日本の学生や先生と触れ合う機会を増やし、自分の意見を述べるトレーニングをしておけば、留学してからの伸びが飛躍的に高まると思うんです」

日本への留学を実現し、そこで身に付いた知識や経験でモンゴルの未来に貢献したい、と願う生徒たちと同じく、増田さんも、大学時代にアメリカに留学している。そこで、軽い気持ちで日本語の教育実習を行ったのだが、自分の、「日本」



1 ゲルと呼ばれる移動型の住居。ビルの乱立するウランバートルとは対照的な風景。

2 授業は、8時半から15時頃まで続く。放課後は、モンゴルでは珍しく、部活動もある。

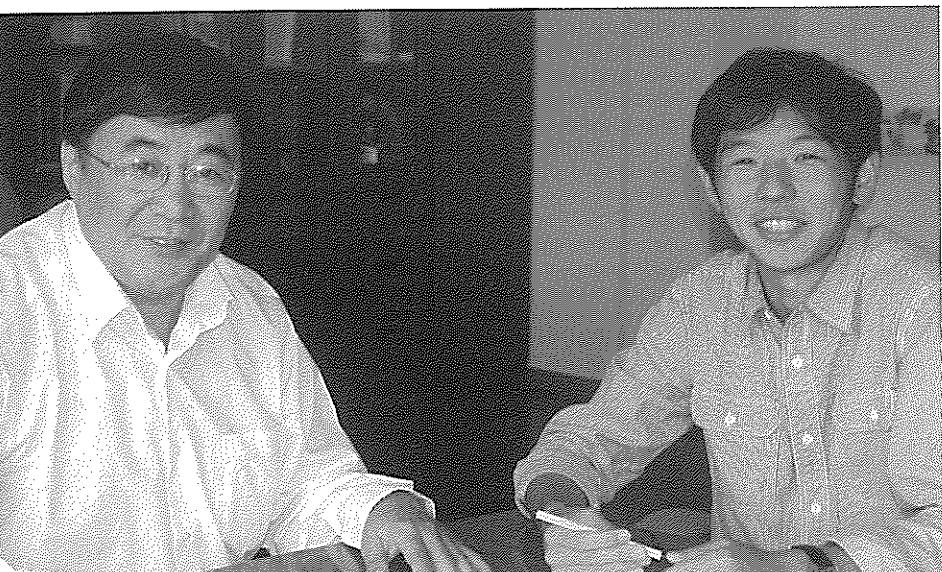
3 旧正月に、生徒の親に食事に招かれて、お祝いを共にしたこと。

4 多くの日本人が新モンゴル高校の設立、そして、運営に協力している。

と「日本語」に対する知識不足を痛感した。帰国後に、大学で日本語教育を専攻し、インターンシップや、日本語学校で教える経験を積んだ。「日本の教育について知る必要もある」と考え、教職課程を修了し、大学院進学も視野に入っていたが、ゼミの先生に薦められ、2010年8月に、新モンゴル高校に赴任することになった。

2年間の異国体験から生まれた、将来の夢

増田さんにとって「モンゴルの親父」的な存在のガルバドラッハ校長は、増田さんのことを、「新卒で経験不足な点もあったが、志を買って採用した。苦労も多かったと思うが、常に向上心を持って多くの人に意見を聞き、何事にも真剣に取り組んできた。今では、生徒たちにとってなくてはならない存在になってくれ



ガルバドラッハ校長(2013年に理事長就任)は、1995年に国費留学生として来日し、東北大学と山形大学で学んでいます。

た」と語る。自身の日本への留学体験によって、モンゴルの教育の遅れを痛感し、若者たちのために、私費を投じてこの学校を立ち上げた校長の存在は、増田さんにとってかけがえのないものとなった。

「校長に、人生を変えられてしまったんですよ(笑)。どんな大きな夢でも、それを本当に実現できるんだ、ってことを、この学校で学びました。モンゴルを離れても、校長がどこかで見守ってくれていると思えば、頑張っていける気がするんです」

増田さんにとって、日本語教師の資格は「海外で生活するためのチケット」だという。この2年間で、海外を知り、また一方で、日本を知ることもできた。

「留学生の中には、数学や物理に特に秀でている人材も多い。彼らが、その力を日本で発揮できずに過ごしているのは、すごくもったいない。留学生が、日本の学生たちともっともっと交流できるような仕掛けを、NPOやNGO、どういう形になるのかわからないけど、つくっていきたいんです。そして、いつの日か、新モンゴル高校のような学びの場をつくる、それが夢なんです」

大学を卒業後、すぐにモンゴルで働き、2年間の勤務を終えようとしている増田さんは、今後のビジョンについて、こう語っている。モンゴルの地で過ごした日々によって視野を広げられた増田さんの挑戦は、こ

れから始まるところだ。

モンゴル国

大学での日本語教育が盛んだが、初等・中等教育での導入も進んでいる。相撲などを通して、日本に関心を持つ人も多い。

人口 ● 約281万人
首都 ● ウランバートル
日本語学習者数 ● 1万1,604人
日本語教師数 ● 238人
日本語教育機関数 ● 66機関
※国際交流基金調査(2009年)による



園児たちを熱中させる、歌って踊れる日本語教師

「ねこ先生、こんにちはー!!」教室に、園児たちの、大きく、元気な声が響く。ここは、台北市にある何嘉仁國際文教集團(以下、HESS)の運営する幼稚園の、日本語クラスだ。ねこ先生と呼ばれる山本桂子さんが教室に入ってきた瞬間から、18人の園児たちは、クラスが始まるのが待ちきれない様子。出欠に答えたたら、日本語という外国語に触れて、楽しむ、30分のレッスンの始まりだ。今日のテーマは乗り物。「バイク」「ふね」「しかんせん」といった言葉を、山本さんは表情豊かに、大きな身振りで、説明する。絵カードを、隠したり見せたり、そんな一挙一動に、子どもたちは身を乗り出し、夢中になっている。大きな声を張り上げて、言葉を覚えたら、山本さんの振り付

けに合わせて、乗り物の歌を歌い、踊り、グループになって、教室内をぐるぐると行進するゲームを楽しむ。アイドルのコンサートのような熱気と一体感に包まれたまま、あっという間にクラスは終了した。

山本さんが、台湾で日本語を教えはじめたのは、2011年9月のこと。その3年前、台湾に留学している友人を訪ねたのが、きっかけだった。

「こっちの人って、乗り物に、お年寄りが乗ってきたら、みんなが競うように、席を譲るんですよ。そんな、温かい心に感動しちゃって、2年間で10回も通っていたんです。友達から、そんなに台湾が好きなら、ここで働いたらいいのに、って言われて、幼稚園で日本語を教える仕事をインターネットで見つけて、応募したんです」



教室の入口に飾られた、園児たちの絵。